
ちび麻る子ちゃん

柳雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ちび麻る子ちゃん

【Nコード】

N 6 6 4 6 P

【作者名】

柳雨

【あらすじ】

風の冷たさがそろそろ厳しくなった静岡県、紅葉の美しさが訪れた秋の季節、まる子は佐々木のじいさんのところへと行きました…
今日も何かステキなことがあったらいいなあ…

（前書き）

原作者・さくらももこ先生、ごめんなさい

キャラ空中崩壊につき閲覧超注意

それは静岡県の木々の緑が紅に染まりつつある秋の訪れ頃に起きた…。

「佐々木のじいさん。」

「ほっほっほ、おや…まるちゃん、よく来たねえ。」

・まる子は近所に住む植物を愛してやまない心優しき佐々木のじいさんの家に遊びにやって来た。

「相変わらず花や木の手入れがいいからちよつとした絶景だねえ。」

「ほっほっほ、それはありがとう、喜んでくれて何よりですよ。」

・佐々木のじいさんは我が子同然に大切に育てた植物達をまる子が褒めてくれたことに対して朗らかな笑みを浮かべた。

「いやいや、お世辞抜きで見事だよ。紅葉も他より一段とキレイに見えるし、柿も美味しそうに実ってるし。えへへ。」

「ほっほっほ、柿なら沢山ありますからあげますよ。」

「うわーい！やったー！」

・しかし食い意地の張ったまる子にとっては紅葉よりもぶつちやく柿の方が見栄えがよく見えていた、佐々木のじいさんは柿をいくつ

かもいでビニール袋に入れて彼女にあげた。

「ん？ねえ、佐々木のじいさん、それなあに？」

・まる子はふと、干されていると思われる葉っぱの様なものを見つけた…そのため聞いてみるととんでもない答えが返ってきた。

「これは大麻ですよ、干してるから正確には乾燥当麻マリファナですがね。」

「え…？それって…？」

・今、コイツはなんと言った？

「ま…麻薬じゃん…。」

・マリファナ、麻薬の一種…と、まる子は以前学校に来た警察の人から受けた講習で聞いたことがある、が…そんなものをなんで持っている？いくら植物好きだからってマリファナアサの元になる麻まで育ててるなんて…。

「ほっほっほ…私は戦時中は麻薬のお世話になりましたね、知ってますか？麻薬のほんの一部は医学的に麻酔として扱われることを…痛みも感じないし眠くならないし、死を恐れぬ帝国軍人にとっては

まさに理想の薬……うぐうッ!？」

「佐々木のじいさん!？」

- 悦に入っ た様な恍惚の表情を浮かべる佐々木のじいさんが昔を語ると突然苦しみ出す…。

「ちなみに佐々木のじいさんの言ったことは本当である…麻薬は一部、手術などで医学的に麻酔として使用される、そして戦争という銃弾飛び交う死地に向かう兵士の恐怖心や痛覚を消す役割も持っているのだ…」。

- 余談であるが、一般人に馴染み深い七味唐辛子やあんパンにも麻薬の元になる芥子ケシの種子やそれを粒にしたものが入れられている、だが芥子は種子の状態では麻薬成分はほとんど無いため食品に使われることは合法的に認められているのだ、尚、種子から発芽した場合とは別だ…麻薬成分が活性化して危険なため法的にも禁じられている。

-話を戻そう…佐々木のじいさんは胸を押さえる形で苦しみ、そして…。

「きえ ええええええええええ！敵襲！敵襲だ！鬼畜米兵死すべし
 イイイイイイ！！アメ公共に我が大日本帝國の大和魂を焼きつ
 けてやれエエエエエエ！神風は我々に吹いているぞ！突撃イイ
 イイイイイ！」

「ちよつ……!? 佐々木のじいさん! 佐々木のじいさあ あああああん
!?!? うわあああああ!」

「…どうやら彼も麻薬中毒だったらしく、わけのわからない幻覚で意識が旧日本兵時代へとトリップしてしまった様だ、狂気に満ちた目で竹槍を突く仕種をしている…突然の豹変ぶりにまる子は怖くなり、その場から逃げ出した…」

・翌日…学校にて。

「はい、次のところを丸尾君、読んでください。」

「ハイ！えー…その昔、中国は清の時代において、阿片^{アヘン}で巨万の富を築き上げ、暴利を貪った商人・羅李鴻^{ラ・リユウ}が世界で初めて麻薬を世の中に広めたと言われている…」

・只今社会科の勉強中、まる子のクラス担任である戸川秀之教諭が学級委員長・丸尾末男を指名して教科書を読ませた（とんでもない内容だが）。

「え！？佐々木のじいさんが麻薬！？」

「そうなんだよ、あたしゃビックリだよ。」

・まる子は大親友である穂波たまえに昨日の珍事の詳細を話していた。

「おかげで佐々木のじいさん昨日パトカーに乗せられてさーいやー参ったよ、本当。」

・その後、騒ぎを聞きつけた近隣住民が通報したため、佐々木のじいさんは麻薬の不法所持で当然逮捕^{オナワ}…マジでシャレにならん出来事

であつた。

「最も、彼自身も阿片中毒だったために最後はある時期から、阿片によつて全てを失つた者や死者達が羅を責めにやつて来る…という幻覚・幻聴に襲われようになり、ついには罪の意識に苛まれて自ら首を吊つて自殺した。」

「…はあ…しかし、昨日知り合いが麻薬中毒で捕まつたばかりだつてのに不謹慎な授業内容だねえ。」

「全くだよ。」

・丸尾の朗読内容を聞いて鬱になるまる子とたまえ。

「後にこの人物の名前から、様子がおかしい人間を指して『ラリつてる』と呼ばれるようになった由来になつたという…（暗黒日文社『裏・阿片戦争史』より）。」

「はい、ありがとうございます、丸尾君。」

「まるで山田みたいな顛末だねえ。」

「ま、まるちゃん！？さすがにそれは山田に失礼だよ！！」

・朗読内容に出た偉人・羅の話を聞いてまる子はクラス1のバカ、クラスの底辺の代表格であり、いつも『アハハ、アハハ』と壊れた様に笑うハタ坊みたいな口調の馬鹿・山田笑太を横目で見て言つたため、たまえは慌ててそれ以上の発言を阻止した。

・山田の名誉を守るため言っておくが、山田のおかしな言動や行動は素であつて、断じて麻薬でラリつてゐるわけではないのだ。

「やだねえ、冗談だよ、たまちゃん。」

「全くもう。」

「…と、談笑する二人だったが、当の山田は…」

「先生ー！山田が突然裸踊りしていますー！！」

「アハハ、アハハ、楽しいじょ。」

「富田君、彼を保健室へ。」

「なんでオレなんだブー！」

「…スッポンポンな山田が股に提げた変なものをプラプラ揺らしながら謎の裸踊りをしていたため、渋谷先生に指名された富田太郎（通称・ブー太郎）が彼を保健室へ連行した…尚、これは彼の素の行為なので悪しからず…」

「麻薬か…嫌なこと思い出すなあ…」

「何かあったのかい？永沢君？」

「実は…。」

「クラスの陰気コンビの片割れ・永沢君男が麻薬についての話で鬱になったため相方（？）であり卑怯の代名詞・藤木茂が尋ねる。」

「昔、僕の家が火事になった原因は麻薬…シャブのやり過ぎでイカ

れた父さんが何を血迷ったか、火をつけたからなんだ。」

「ええええええええ！？な…何、その超展開！！」

- 藤木が驚いたのも無理はない、永沢の家が火事になったのは知ってはいたが、まさかシャブでラリった父親による放火とは思わなかったからだ。

「た、大変だったね…。」

「別に、君なんかに心配される筋合いなんかないさ、まあもつとも麻薬なんてものは藤木君みたいな心の弱い卑怯者がするようなものだよ。」

「なんだとオオオオオ！？キエアオエエエエエエエ！！」

「ぐええええええええ！？」

- 折角藤木が心配したのに永沢がいつもの様ないらんこと言ったばかりに、藤木が奇声を発して永沢の首を絞めた…ちなみにクラスの者達はそれを敢えて黙殺した。

- 後に永沢は絞殺されて死亡…藤木が麻薬中毒と判明し、更正のため後日、入院することとなった。

「コホン…では気を取り直して、次は小杉君…に…。」

- 先生が食いしん坊にしていやしん坊な美味しんぼ・小杉太を次の朗読に指名したが…。

「うんめエエエエエエ… あんパンうめえよ。」

「… あんパンを楽しんでいた。

「あんパンとはあんこが詰まったパンのことではない、シンナー遊びのことを俗に『アンパン』と呼ぶのだ。

「富田君、小杉君を保健室へ。」

「またオレかブー！？ そんな役は、はまじか関口にでもすりやいのにブー！」

「先生へブーイングしながらブー太郎は小杉を保健室に連行した…。

「皆さん、この前も警察の方の講習で言っていました、麻薬はとても怖いものです、小杉君みたいなことになるので注意…ぐぬぬ…！」

「先生！？」

「注意した矢先、嫌な予感が…」

「これさえあれば疲れ知らずウウウウウー！校長出世コースも夢じゃないー！！ヒヤッハー！！」

・血走った目に呂律の回らない口調で先生はテンション上がったデスメタル・ミュージシャンみたいに教卓に頭ガンガンガン叩きつけていた…もはや弁解の余地は無い。

・教卓からヒロポン（『疲労をポンと取る』の略の薬）のビンが落ちた…どうやらポン中だったらしい。

「先生がおかしくなったー！？」

「ブー太郎！早く保健室に！！」

「だからなんでオレなんだよブー！？あーもー！！サッサと行くぞ！くれないじじー！！」

「解りました、行きましょう…。」

・ああ、なんで自分が…そう思いながらブー太郎はようやく落ち着いていた先生…否、くれないじじー（『クレイジーなジジイ』）の手を引いて保健室に連行した、もはや授業どころではないため授業は強制終了となった、そして先生の人生も強制終了となった。

- 尚、先生はこの後、保健室の先生を相手に『バブバブ』言いながら赤ちゃんプレイにふけたという…。

- 休み時間。

「世の中以前にクラス中で麻薬が氾濫してるとは…ズバリ、嘆かわしいでしょう！」

「「本当だよ…。」」

- 丸尾の言う通り、クラス中で三人もの麻薬中毒者が出るとは…まる子とたまえは頭が痛くなった…。

「そもそも誰が麻薬なんて広めてるのかな？」

「ズバリ！暴力団…所謂ヤクザとかそういう人達でしょう…！」

「ひいつ！？」

- 麻薬＝暴力団、彼らから直接買ったりネットで手に入れるなり出来てしまう世の中なのだから物騒である。

「でも静岡にヤクザなんて…。」

- …と、まる子が言おうとした時、授業中よりももっとひどい珍事が起きた。

「ああ、ママ…僕を導いてくれよママ…!!」

「あん…! ああん!! あッ! あッ! ああああ!!」

- …金持ちなゴージャスBOY・花輪和彦とクラスのマドンナ的存在の城ヶ崎姫子が全裸で情熱的にエキサイティングしていた。

「ふが…ふが…」。

- ちなみに二人の下には全裸になった眼鏡ブス・みぎわ花子が鼻フツクに目隠しに猿轡、首輪をされた状態で縛られ、恍惚の笑みで花輪の放置プレイに酔いしれていた。

「おらおら! もっと××しろよッ!! 解ったかッ!? 僕は卑怯者じゃない! 卑怯者じゃないんだよ!! 解ったか! この××女がああああ!!」

「はぐ…うぐ…は、はい…くああああ!! あっ…熱いいいい!!」

- さらにさつき連行されたはずの藤木が蝋燭片手に、全裸な上に荒縄で亀甲縛りで縛られて逆さまに吊された少女・笹山かず子と過剰なまでのSMプレイしていた。

「げへへへ…ギャッハハハハハ!!」

「いやあああああ！！やめてええええええ！！」

・良識ある…はずだった少年・長山治が全裸に剥かれたて四肢を拘束された眼鏡っ子・土橋とし子に鞭を振るい、痛々しい生傷をつけていく。

・他にも『はまじ』こと浜崎憲考や髪の毛が少ない関口しげるなどが女子を襲ってレイプしていた…もはやクラス中での乱交パーティー状態である。

「こ…これは…一体…？」

「やあ…どうしたんだい？君達も楽しみなよ…花輪グループ提供の麻薬でジャンジャンやろうよベイビー。」

「花輪…てめえ…！！」

・正義感溢るるクラスのイケメンスポーツマンコンビ・大野けんいちと杉山さとしはあまりの異常事態にたじろいだ、その原因が自ら主犯と名乗る花輪にあると知り、怒りの炎を燃やした。

・花輪グループは裏では海外から麻薬を輸入して世界中に麻薬を広めて財を築き上げ、幾多の人間を廃人に追いやり、非合法的な取り立てで金をむしり取り、私腹を肥やしていた…まさに彼らは現代の羅李鴻であった。

「このヤロオオオオオ！！」

「目エ覚ましやがれエエエエエエ！！」

「大野君！杉山君！！」

- 大野と杉山は固く握り絞めた拳を振るい上げ、花輪に立ち向かうも…。

「ハハハハハハ…皆殺しだよ！！ベイビー！！」

「『『『『ぎゃあああああああああ！！』』』』」

- …だが、花輪は事前に教室に仕掛けたガトリングガンによる一斉掃射でクラス全員を巻き込みながら大野と杉山をアッサリ返り討ちにしてしまった。

「ハハハハハハ…アハハハハハハ…ん？」

- 教室中に広がる硝煙の匂いや飛散する血液、築かれた死体の山の中、花輪は学校の校門をブチ抜いてスピン気味に校庭に停車する複数のパトカーの存在に気づいた、そして刑事が一人パトカーから降りてスピーカーで怒鳴り散らす。

「花輪和彦！貴様の悪事は貴様と繋がった佐々木のじいさんの自白からもう解っている！！組織の元締めである海外の貴様の母親とその幹部であるマークと西城は逮捕された！！もはや花輪グループは潰滅状態…後は貴様だけだ！！観念しろッ！！」

- どうやら…昨日逮捕された花輪グループの売人の一人である佐々木のじいさんの自供によって、今まで綿密に揉み潰してきた花輪グループの悪事が明るみになってしまい、花輪の母親も、幹部二人…

海外の友達・マークや執事の西城秀治（通称・ヒデじい）も既に逮捕されてしまったようだ。

・今も警察は花輪家の屋敷の強制捜査に入り、関係者を全て逮捕、麻薬も全て押収した。

「そ…そんな…ママが…ママが逮捕だなんて！！うわあああああああああ！！」

・それを聞いた途端…花輪の狂気の眼から突如、ブワツと涙が溢れ出し、全裸のまま泣き叫んだ…。

「ママあああああ！！ママあああああ！！」

・20代の若く美しく優しく、ただでさえ滅多に会えないのにその母にもう会えない……それを知り花輪は今この場所にいない母を幼子の様に呼びながら号泣した。

「ハハハハ…ママがいない人生なんて…僕には堪えられないよ…。」

「…ん！？お、おい！！ナニをする気だ！！やめろツ！！」

・花輪は頭になんと、マグナムを突き付け、刑事達の制止も聞かず…。

・ズダアアアアンツ！！

・血溜まりの教室に銃声だけが虚しく響き渡る…マグナムの威力で頭とその中身をブツ飛ばし、花輪和彦は自らの命を絶ち、あまりにも短過ぎる人生の幕を降ろす…。

・こうして静岡麻薬汜濫事件は首謀者の一人・花輪の自殺によって解決された…。

「…嫌な事件、だったですね…。」

「…ああ、そうだな、一平。」

・あれから五年後の静岡県秋、当時事件を担当していた一平という若い刑事が相方の老刑事とこの事件の悲惨さを思い出しながら語らっていた。

「どうです？今夜？また『とみ』で一杯…。」

「フツ…いいな。」

・冷たい風に吹かれながら、一平と老刑事は溜まり場にいる小料理屋『とみ』で事件解決をささやかに祝うことに決め、早速足を運んだという…。

（後書き）

本編で名前が出た阿片商人・羅李鴻は架空の人物です、社会科の教科書や歴史書を広げても見つかりませんので御注意を…

また、芥子の種子が七味やアンパンに使われてるのは漫画『焼きたてジャぱん』を参考にしました

麻薬はくれぐれも絶対にやってはいけません…ダメ、ゼツタイ

犯罪いくない…それでは、柳雨でした

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6646p/>

ちび麻る子ちゃん

2010年12月30日23時46分発行